

申請者: Srisupha-O-Larn, Suphawan

論文題目: Health Care as Export: The Case Study of Thai Health Care Industry  
(輸出としての医療—タイの医療産業を事例に)

審査員 青島矢一  
長岡貞男  
米山高生

タイの医療産業は、自国内のサービスとは別に、多くの外国人患者を受け入れる輸出産業として発展している。本論文はこの発展過程を詳細に調べたものである。筆者はタイの医療産業の発展を、近代医療が導入される1970年代まで、近代医療が普及する1980年代、私立病院ブームが起きる1990年から1996年、そして1997年におきた通貨危機以降の時期に分けて記述している。本論文の最大の貢献は、通貨危機以降に、タイの医療産業が「輸出産業」として転換される時期の記述にある。ここでは、通産省輸出振興局、総務省観光局、投資委員会などが、縦割りの官僚組織を越えて協力し、私立病院協会を含む民間と戦略シナリオを共有して、産業転換が行われた興味深いプロセスが記述されている。

古典的な経済発展論は、1次産業から2次産業、そして3次産業へと、先進国を後追いする形での経済発展を仮定する傾向がある。しかしグローバル化をきっかけとして、例えば、インドやアイルランド、イスラエルのソフトウェア産業の台頭が示すように、必ずしもそうした直線的な進歩モデルにあてはまらない現象がみられるようになってきている。タイの医療産業の発展をそうした事例の1つとみることができれば、新しい経済発展理論につながる1つの材料を提供していると考えられる。筆者も既存理論の検討をもとにこの点を強調している。

本論文の貢献をまとめるならば、医療を「輸出産業」とする考え方の提示、詳細な事例記述、既存の経済発展論に対する新しい視座の提供ということになる。

ただし、問題がないわけではない。第1に、タイの医療産業が輸出産業として成長したとはいえ、タイの外貨獲得に占める割合はわずかであり、産業として確立したと判断することにはまだ疑問がある。この点に関して、本論文で提示されているデータは2000年以前のものであり、発展の時期が1998年以降であることからして、雇用データなども含めてより新しいデータで補完する必要がある。第2に、「輸出としての医療」という考え方が、古典的な観光産業などと異なり、経済発展の理論にどのような新しい視点を提供するのかを、さらに深く検討する必要がある。第3に、歴史記述という点からすると、さらに深く正確な記述が求められる部分がある。特に1997年以降の記述に関しては、関係した組織の内情や具体的な人々のやり取りも含めて、さらに詳細な調査が必要と思われる。

このような問題はありますが、それらは今後の研究によって十分に改善できるものであると考えられ、本論文の基本的な貢献を損なうものではない。

よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第4条第1項の規定により一橋大学博士(商学)の学位を受けるに値するものと判断する。